

## 巻頭寄稿

# ある大学教員のコロナ禍における一年

平 賀 正 剛

### 目 次

1. はじめに
2. 未知のウィルス
3. 膨らんでいく疑問
4. 自分でデータを集め、考える
5. 経験に照らして
6. 解放
7. 教訓
8. 今後大学教員が考えなければならないこと
9. 「顰像」として

## 1. はじめに

本号では、特別企画「コロナ禍での経営学教育の方法と課題～教育効果の維持・向上に向けて～」と題し、我が国においては令和2年1月頃確認され、その後感染が拡大した新型コロナウイルス（以下、新型コロナ）により各種の遠隔講義を余儀なくされた令和2年度における、本学経営学部教員の教育活動の総括を行うこととなった。編集委員からは、その巻頭寄稿を依頼されたが、正直に申し上げれば、巻頭言としてどのような内容の文章が相応しいのか、迷っている。

編集委員からは「経営学部生にも読んでもらえるようなものであればなおよい」という趣旨の編集方針をうかがった。思えばこの一年、この新型コロナについて自分なりに情報収集し、一個人として新型コロナにどう対応すべきか考える中で、実に多くのことに気付かされた。そこには、一教員の立場として是非学生に伝えておきたいと思うことも含まれていた。そこで本稿では、主な読者として学生諸君をも想定し、コロナ禍の一年を通じて考えたことを率直に記

したい。そのために、まず私自身のこの一年を振り返ることからスタートしたい。

## 2. 未知のウィルス

私は令和2年4月1日をもって本学経営学部長を拝命した。新型コロナの感染拡大によって4月からの講義を例年通りに行うことが難しいのは、すでに3月から学内の各種会議体において認識されていた。したがって、学部長としての最初の仕事は、新型コロナ対応であったと言ってよい。林幹人教務主任の超人的な活躍のおかげで、新入生に関する各種学部、学部の講義、ならびに教職員会議等の通常業務は、何とか滞りなく進んでいった。

学部長というのは、全学の対コロナ方針の策定に関与する立場ではなかったが、それでも学部を預かる身として、新型コロナの情報収集に努めた。といっても、さほど大袈裟なものではなく、日々の新聞やテレビのニュースでの関連情報をチェックするなど、誰にでもできる範囲のことである。

当初は、一連の報道を見るにつけ、この未知

のウィルスを(当然のことではあるが)非常に警戒し、ややもすれば神経質になっていた。たとえば、普段なら口をつけて飲むペットボトルの水を、数センチ離して口内に流し込むという方法で飲んでいて、これは、以前にテレビ番組で紹介されていた、ペットボトル内で雑菌が繁殖しないようにするための飲み方である。新型コロナは罹患しても無症状の場合もあるという。もし気付かぬうちに自分が罹患しており、ペットボトルに口を付けて飲むことで中の水にウィルスが混入し、その飲み残しがウィルスの温床になってしまったら…と考えての行動であった。また家庭では、キッチン用除菌アルコールを書斎の机に噴霧したり、妻には手洗いの作法を細かく指導するなど、危機管理意識の発露ともとれる行動を繰り返していた。しかし、除菌スプレーは当時品薄の「貴重物資」であり、また妻は水仕事で頻繁に手を流水に晒していることを考えれば、彼女にとって私こそウィルス以上に鬱陶しい存在であったろう。

### 3. 膨らんでいく疑問

何ヶ月か経った頃から、私は日々のマスメディアの報道内容のいくつかに、違和感を覚えるようになっていた。きっかけは、報道番組でよく伝えられる「新型コロナ感染者数(PCR検査の陽性者数)が〇曜日としては過去最多」のフレーズであったと記憶している。当初はそれを感染拡大のサインとして重大に受け止めていたものの、冷静に考えれば、これは「昨年のGDPは子年としては過去最高」というような話に等しいのではないかと、思えてきた。はたしてこの情報に、どんな意味(重要性)があるのだろうか。

もし仮に曜日によって感染者数の多寡に何らかの影響があるのだとすれば、むしろ週ごとの合計感染者数や一日平均感染者数で過去との比較を行い、感染拡大の有無を論じるべきではないのか——今思えば、この時点で私は冷静に、また中長期的に物事を捉える視点を取り戻したのかもしれない。

そうになると、秋以降、新型コロナ関連報道に

おいて目立つようになった「第〇波」という表現にも違和感が持たれた。この「波」というのも、コロナが終息した後、期間全体を眺めて初めて「この時が第1波で、この時が第2波…」と言えるのではないだろうか。この頃から、日々の感染者数で一喜一憂するようなマスメディアの報道姿勢に疑問を覚えるようになり、それ以降我が家では地上波の番組にチャンネルを合わせる事がなくなっていった。

### 4. 自分でデータを集め、考える

年明け早々、東京都とその隣接県に2度目の緊急事態宣言が発令されると、1年半ばには愛知県もその宣言下に入ることとなった。2月は春休み中で講義はないものの、講義以上に人の集まる“入試”という一大イベントがある。幸いにも入試で大きなトラブルもなく、また2月末をもって緊急事態宣言も解除された。

3月初旬は、どの大学も“後期入試”の時期である。日頃親しくして頂いている関西方面の大学教授が、勤務校の後期地方入試のため名古屋を訪れた。面会の機会を得た私は、この教授と新型コロナ禍についても意見交換したが、この方も新型コロナ、特にマスメディアの報道姿勢について、私と同じ意見だった。この時に印象的だったのが「なぜメディアは分母に触れないのか」という同教授の発言であった。

この「分母発言」に触発された私は、愛知県の感染者数に関するデータを、自分なりに加工してみることにした。といっても特別な計算をするわけではない。計算したのは、私が暮らす名古屋市における新型コロナ感染者数の名古屋市人口に占める比率である。その際、計算時の「分子」にも若干の工夫を加えてみた。分子に新規感染者数や累積感染者数ではなく、日々の罹患者数を用いることである。メディアの報道では、毎日の新規感染者数と累積感染者数は伝えられる。しかし、新規感染者がいれば、回復者もいるはずである。その数を差し引いて、日々名古屋市に何人の罹患者がいるのかを知ることの方が、さまざまな点で有益な情報ではないか。そう思ったのである。

幸い、名古屋市は令和2年2月8日という早い段階から、退院・回復者数を含む詳細なデータ公開してくれており<sup>(1)</sup>、容易に計算が可能であった。具体的には、令和2年2月8日の罹患者数を起点に翌日の新規感染者数を加算し、回復者数・死亡者数を減算することで、日々の罹患者数を計算した。結果、もっとも罹患者数が多かったのは、令和3年1月17日の1,640名であった。これは、比率にして名古屋市の全人口の0.071%であった<sup>(2)</sup>。

この比率がどの程度の重大性を持つのか、正直私にはわからない。ただ、この計算で、それまで抱いていた新型コロナに関する不安が薄らいだことは事実である。実は私の胃には、直径2ミリ程度の「過形成ポリープ」がある。これは約1%の確率、すなわち100人に1人の割合でガン化するという。新型コロナの感染が主に罹患者との接触やその飛沫の付着を通じて、つまり人と出会うことによって起きるとすれば、

私が新型コロナに感染し、死亡するより、ポリープが胃ガンに進行し死亡する確率の方が高いのではないか。なお、過形成ポリープに関しては、医師からは定期的な胃カメラ検査を勧められただけで、日頃気を付けることは特に何も無いと言われている。

同時に、もう一つ行った計算がある。新規感染者の増加率である。マスメディアが経済を報じる際、「成長率」に言及するのをよく見聞する。実数が増加していても、成長率が年々下がれば、それはいずれ成長が止まり、経済が縮小していくシグナルとみなされる。この考え方を新型コロナに適用すれば、感染者数の実数は増えていようと、その増加率が下がっていれば、感染はたとえ一時的であれ、収束に向かっているとと言える。

今、この原稿を書いている3月末の時点で、過去約半年間の、愛知県における週毎の新規感染者数とその増加率を計算した結果が図表1-1

図表 1-1：愛知県における新型コロナ新規感染者と増加率

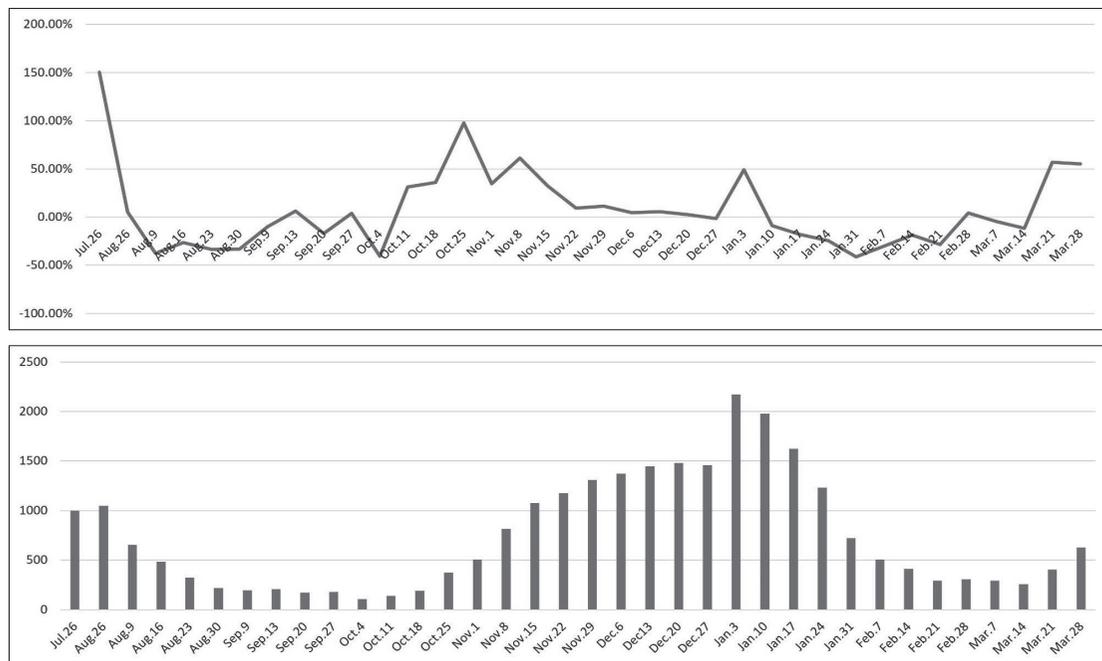
週の開始日	新規陽性者	増加率	日付	新規陽性者	増加率
2020. Jun.28	2	-	Nov.15	1076	32.35%
Jul.5	6	200.00%	Nov.22	1175	9.20%
Jul.12	88	1366.67%	Nov.29	1309	11.40%
Jul.19	398	352.27%	Dec.6	1371	4.74%
Jul.26	996	150.25%	Dec.13	1446	5.47%
Aug.2	1048	5.22%	Dec.20	1481	2.42%
Aug.9	654	-37.60%	Dec.27	1457	-1.62%
Aug.16	482	-26.30%	2021. Jan.3	2172	49.07%
Aug.23	321	-33.40%	Jan.10	1979	-8.89%
Aug.30	215	-33.02%	Jan.17	1623	-17.99%
Sep.6	194	-9.77%	Jan.24	1229	-24.28%
Sep.13	206	6.19%	Jan.31	723	-41.17%
Sep.20	171	-16.99%	Feb.7	505	-30.15%
Sep.27	178	4.09%	Feb.14	410	-18.81%
Oct.4	106	-40.45%	Feb.21	293	-28.54%
Oct.11	139	31.13%	Feb.28	305	4.10%
Oct.18	189	35.97%	Mar.7	291	-4.59%
Oct.25	374	97.88%	Mar.14	257	-11.68%
Nov.1	504	34.76%	Mar.21	403	56.81%
Nov.8	813	61.31%	Mar.28	625	55.09%

※「週の開始日」は隔週が始まる日付（毎日曜日）を意味する。

(1) 名古屋市の公式ウェブサイト (<https://www.city.nagoya.jp/kenkofukushi/page/0000126920.html>) から CSV ファイルでダウンロード可能である

(2) この計算を行ったのは令和3年3月半ばである。その後の本稿を脱稿した3月末までの数値も計算してみたが、1月17日の記録を上回ることはなかった。

図表 1-2: 愛知県における新型コロナ新規感染者(週毎)の増加率(上)と実数(下)グラフ



および1-2である<sup>(3)</sup>。

増加率を見てまず思うのは、いわゆる第2波においては感染爆発<sup>(4)</sup>は少なくとも愛知県下では起きてはこなかったということである。

次に、関東で緊急事態宣言が発令された1月3日の週、および愛知県で同宣言が発令された1月10日の週を見ると、感染者数はいずれも2,000人前後であり、この辺りで波の頂点が到来したように見える。増加率で見ると、たしかに年明けに一時的なヤマはあるものの、前年の10月25日の週をピークにその後は徐々に収束に向かっていったのではないかと見て取れる。いずれにしても、それまでの報道においては、私がチェックしていた範囲では増加率について言及したニュースを見聞きしたことがなかったため、非常に興味深かった。

(3) データはNHKの公式ウェブサイトにおける「特設サイト 新型コロナウイルス」(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data/pref/aichi.html>)で日々更新・公表されているものをダウンロードし、使用した。

(4) 報道(<https://news.yahoo.co.jp/articles/4df35746ac97403ac10ca39579aa61273372a325>)によれば、令和2年4月20日に行われた専門家会議の説明では「欧米で見られるように爆発的な患者数の増加を示すが、2日ないし3日のうちに累積患者数が倍増し、しかもそのスピードが継続的にみられる状態」がオーバーシュートと定義された。

ここでもう一つ考えさせられたのは、緊急事態宣言の効果である。新型コロナには1～14日の潜伏期間があるという。新型コロナ感染に人流が大きく影響しているとすれば、増加率がピークから減少に転じる局面で発令された緊急事態宣言が、その後の感染者数の減少にはたしてどの程度効果があったのだろうか、不敬にも思ってしまった。もちろん、愛知県政を批判するつもりなど毛頭ない。ただこの時「ひよっとすると過度の自粛は必要ないのではないか」といささか気が楽になったのも確かである。

## 5. 経験に照らして

思えば私は体の弱い子供だった。それもあって両親は衛生にはうるさかった。外から帰ったら必ず手を洗い、うがいを言われた。特に人混みから戻った時はなおさらだった。お金を触った後は手を口に入れたり、食べ物に触ったりしてはいけないということも繰り返し躰けられた。おかげで長じてからも、手洗い・うがいの習慣が身についたが、それでも風邪を引いたり、感染症にかかることがあったのは、思え

ば心身ともに疲れている時だった。

その顕著な例が、在外研究先のマレーシアで罹患したインフルエンザである。ある日、私は突如 39 度以上の高熱と咳、関節の痛みに見舞われた。後に知らされたのは、その数日前、共同研究者の紹介で昼食を共にしたゲストが、翌日にインフルエンザを発症したとのことだった。昼食を取ったのはインド料理店であり、手で直接口に運ぶ料理も少なくない。何よりこの時は、4 月 1 日の着任後一ヶ月ほど経った頃で、5 月にしてすでに真夏の暑さに体が慣れず、また生活環境の変化（特に万事がスローペースで進むこと）に精神的にも疲れていた。逆に数年前、妻がインフルエンザに感染した際には、自身は感染を免れることができた。思い起こせば、この時はこまめな手洗いとうがい、そして十分な睡眠で疲れを次の日に残さぬよう心掛けていた。

新型コロナは文字通り、従来は主に冬場に流行し、いわゆる風邪症状を引き起こしてきたコロナウィルスの「新型」であるという。感染力や症状について、「旧型」やインフルエンザとの違いには諸説あるようだが、類似の感染形態や症状を持つウイルスであるなら、個人が採るべき対策も、おそらくは同様であろう。そう考えた私は、引き続き、マスク着用はもちろん、こまめな手洗いとうがいに加え、帰宅後はできるだけすぐに入浴するとともに、早寝早起きを心掛けた。

そのおかげだろうか、例年 1, 2 回は風邪を引く私が、まったく体調を崩すことなくこの 1 年を終えたのである。

## 6. 解放

自分でデータを集計し、上記のような経験を踏まえながら考え、判断するようになった今、私は非常に穏やかな気持ちでいることができています。子供の頃から言われてきたことを日々実践し、疲労を感じた時は休み、栄養を十分に採る。当たり前なことを当たり前にする毎日である。一年前の軽挙妄動を思い出すと、ただただ恥じ入るばかりだ。

間違いのないように申し上げておきたいが、私は新型コロナを甘く見ているわけではない。先にも述べたように、私はさほど丈夫ではない。小学校 2 年生の時、おたふく風邪で顔が変形するほど腫れ上がり、痛みで一週間まともに食事もできなかった。4 年生の時には溶連菌に感染し、40 度近い高熱に文字通り三日三晩うなされた。ノロウイルスに感染し重度の脱水症状に見舞われたのも一度ではない。むしろ感染症の恐ろしさは身をもって知っている。在外研究時には、日本人には馴染みがなく（つまり免疫がない）、またワクチンも存在しないデング熱にも気を付けねばならず、蚊やボウフラが発生しないよう気も使った。

私が言いたいのは、定量的なデータを集め、加工し、それを定性的な情報や知識、何より実体験と結び付けながら自分自身で考えることを通じ、昨年来抱えていた、暗澹とした、圧倒的な、さりとてどこか現実味のない不安感を払拭し、冷静さや心の安らぎを取り戻せたということ、さらには（繁華街へのちょっとした外出など）普段であれば何でもない行動について逐一過剰に考えることにより堆積していった罪悪感から解放されたことである。これをマックス・ウェーバーが言う「呪術からの解放」に例えたらいささかの外れだろうか。

## 7. 教訓

この体験は、我々の教育に通じるものがあるように思う。痛感するのは、やはりリテラシー、特に数字に基づいて物事を捉え、判断していくことの重要性である。情報過多の時代と言われて久しい。玉石混合のさまざまな言説が飛び交う中、数字に関するリテラシーはますます重要になってくるであろう。今回私が行ったのは、小学生高学年レベルの、誰にでもできる範囲のことである。だが、たったその程度のことでも、

(5) 街では「デング熱は致死率 5%」という注意喚起の立て看板を何度か見かけ、恐怖を感じていた。また、ボウフラの抜き打ち検査もあり、自宅のプランターなどに溜まった雨水を放置し、そこにボウフラが発生していた場合、1 匹につき 5 リンギ（当時約 130 円）の罰金を科すという当局の指導も受けていた。

私は大いに救われた。学部で学ぶ統計的手法がマスターできれば、もっと大きな気付きが得られるだろう。

また、経験・体験の重要性も再認識した。「身に染みる」という表現があるが、経験・体験は体に何かを刻み込むことであり、それが血肉となり、自分自身の確固たる判断基準を形成してくれる。経営学部の理念は「理論と実践」である。実習や演習、その他体験型の授業を通じ、座学で学んだ方法論や理論を活かし、知識を「体得」することが重要なのだろう。その意味で、経営学部を代表する体験型授業であるバーチャルカンパニーが、この1年も中断されることなく続き、あまつさえ「きしめんチップス」という成果を得たことは、大変有意義であったと思われる。

## 8. 今後大学教員が考えなければならぬこと

もう一つ考えることがある。それは、我々のコロナ対策は果たして適切だったのだろうか、ということである。これまで二度にわたって発令された緊急事態宣言の効果は、おそらくコロナ終息後に検証されることになるのであろう。重ねて言うが、私は県政・国政を批判するつもりなどない。だが、緊急事態宣言にさしたる感染抑止効果が認められなかった、などということがもし証明された場合、我々が、無意味な緊急事態宣言に応じて学生の行動を制限したことは、非常に大きな問題となるのではないだろうか。

それは、科学的な根拠なく学生から大学生活におけるさまざまな機会を奪ってしまったというだけにとどまらない。本来、最高学府の徒として知的に下すべき判断を、下さなかった、もしくは下せなかったことを意味するものになりはしないだろうか。だとすれば、それは大学というものの根幹にかかわる事態のようにも思える。

## 9. 「顰像」として

本号の特集にはいくつかの意義があるように思うが、私自身はその一つに徳川家康の「顰像(しかみぞう)」的な意義を感じている。顰像とは、三方ヶ原の戦いで武田信玄に一敗地に塗れ、這う這うの体で逃げ帰った家康が、将来の戒めのために描かせたという自画像である。

この一年の私個人の教育活動を振り返ると、講義科目については対面時と同様の教育効果を維持できたのではないかと自負している。一方で、演習(ゼミ)、特に2年半の演習の中でもっとも中核となる3年次の演習については、ゼミ生に十分なことがしてやれなかったと悔やんでいる。完全な遠隔形式で行われた春学期の専門演習では、詳細なコメントをメールで各ゼミ生に送っていたが、直接指導できないもどかしさや気負いもあり、つい文章が辛辣になることもしばしばだった。それがゼミ生の意欲を逆に削いでしまった嫌いもある。そのことを自らここに告白し、今後の戒めとして残しておきたい。同時に、本号掲載の論考(他の先生方の取り組み)を読み、次の有事に備えたい。